

## 地元企業・行政機関との連携による PBL 型授業設計とその実践

### Practice of case method learning with local business organizations as PBL

澤崎敏文  
Toshifumi SAWAZAKI  
仁愛女子短期大学  
Jin-ai Women's College

Email: sawazaki@jin-ai.ac.jp

あらまし：主体的で深い学びを創発させるためには、職場や市民生活における「リアルな課題」に取り組み、プロセスの中で評価することが重要である。そこで、学生がリアリティを持って学習できるような PBL 型授業を構築するにあたり、地元企業・行政機関と連携し、現実の問題を授業課題として活用した実践例とその課題を報告する。

キーワード：アクティブラーニング、PBL、SECI モデル、授業設計、授業実践

#### 1. はじめに

ここ数年、本学で実施している学生意識調査の結果から、「将来の見通しが無い」との回答が増加傾向にある。これらは、本学だけに限った課題ではない。一般に、「基礎学力」「学習意欲」「将来への意欲」が低い最近の大学生に対して、主体的で深い学びを創発させるためには、職場や市民生活における「リアルな課題」に取り組み、プロセスの中で評価することが重要であるといわれる。それらを解決するために、学生がリアリティを持って学習できるような PBL 型授業の設計方法の構築に継続的に取り組んでいるところであるが、本稿では、PBL 型授業で提示される課題としてどのようなものであれば学生がリアリティを持ち、かつ、学習意欲の向上につながるかという視点で試行した 3 つの事例を考察する。

#### 2. 課題の位置づけと授業設計

今回は本学で開講されている、ビジネス実務演習、コミュニケーション演習、街中インターンシップの 3 つの授業等にて PBL 型授業を実践した。以前から、どの授業もグループワーク等を多用したアクティブラーニング型で授業を行っており、そのベースとして企業組織等でのナレッジマネジメントでも知られる SECI モデルを参考にした授業設計を実施してきた。



図 SECI モデル

授業等での課題に対しての学生の諸活動を SECI モデルで表すと以下の通りであり、学生はこれらをプロジェクトの過程でスパイラルに繰り返し、集合知への蓄積を高めていく。

- (S) グループによる討論
- (E) 企画書、計画書等作成による知識の表出化
- (C) 表出化された知識の融合、アイディアの発展
- (I) 実践により知識が暗黙知化する。

#### 3. 企業等との連携実践例

本稿で紹介するのは、地元大型商業施設、福井市役所、市観光物産館（指定管理者）それぞれと連携した以下の 3 つの事例である。

##### 3.1 地元大型商業施設でのマーケティング調査

○授業名等：ビジネス実務演習 2 回生 60 名  
○実施期間：後期 11 月～12 月の 2 か月  
○実施内容：本授業は「ビジネス実務士」資格取得のための必修授業であり、通年 30 週で構成される。前期 15 週で仕事に必要な基礎知識を習得。後期は、前期の知識を活かして、ケースメソッド型の課題解決を、グループワークを通して実践し、ビジネスの実際を学ぶという授業スタイルをとってきた。本年度は、経済産業省補助事業の一環として地元大型商業施設（以下「モール」）から大学が依頼を受けたマーケティング調査の一部を、学生が PBL 型授業の一環として実施した。授業（プロジェクト）の主な流れとしては以下のとおり。

- ・ 10 月上旬：後期の授業から教員が全体計画・調査目的の提示。4～5 人のグループに分かれて調査項目をまとめる。
- ・ 11 月上旬：学生に対して、直接、モールの事務局長による調査事業の協力依頼、説明を実施
- ・ 11 月下旬：学外研修授業として半日の店舗調査を実施。タブレット端末等を活用した来店客ヒアリング調査、店舗調査を実施
- ・ 12 月中旬：学生による調査結果を集計・報告、具体

的改善点の洗い出し

- ・ 3月中旬：最終報告書への学生意見の反映



写真1 モールでヒアリング調査する学生

### 3.2 福井市との連携によるパンフレット作成

○授業名等：コミュニケーション演習（1回生）70名

○実施期間：10月～12月

○実施内容：この授業は、地域の課題解決をとおしてコミュニケーションのあり方を学ぶことを目的に昨年度から新設された授業である。昨年9月に福井市役所から移住・定住促進のためのパンフレット作成を依頼され、授業内で基本コンセプト、基本デザインの作成までを取り組んだ。授業の流れは以下のとおり。

- ・ 10月上旬：教員が授業全体の流れ・目的等を説明
- ・ 10月中旬：福井市役所担当者からの協力依頼、趣旨説明を学生に対して実施
- ・ 10月下旬：4～5人のグループに分かれて、移住・定住促進に関する問題、課題の調査、今後の方針等について計画策定、発表を実施
- ・ 11月上旬：パンフレットのコンセプトを考えるためのワークショップを全体で実施
- ・ 11月中旬：パンフレットに記載する内容等をグループごとに検討
- ・ 11月下旬：プロトタイプを作成し、依頼主である福井市に提示
- ・ 12月上旬：基本コンセプトとプロトタイプをデザイナーへ渡し、プロジェクトの完了
- ・ 2月下旬：パンフレットの完成、東京等での配布



写真2 完成した移住・定住促進パンフレット

### 3.3 市観光物産館のポスター作成

○実施授業：街中インターンシップ 1回生15名

○実施期間：3月～4月

○実施内容：PBL型授業のプレ企画という主旨で、企画実践に参加する学生を募集。4月末にJR福井駅前にオープンする福井市観光物産館内のPRポスターを企画・作成する内容で、指定管理会社（株式会社大津屋）の協力のもと企画実践活動を行った。

- ・ 3月上旬：指定管理会社（大津屋）社長からマーケティング等に関する講義と企画立案・ポスター作成に関する指示を受ける。
- ・ 3月中旬：企画主旨にあわせた内容の検討
- ・ 3月下旬：ポスター作成準備（素材あつめ、使用する写真の著作権交渉、写真撮影、コピー作成等）
- ・ 4月上旬：ポスターデザイン、印刷
- ・ 4月下旬：観光物産館オープンに併せたポスターの掲示・一般公開



写真3 社長との打合せ風景と完成したポスター

## 4. まとめ

PBL型の授業による定量的な評価は困難であると言われるが、それらはビジネスにおける事業評価が困難であることと同様である。一方で、学生の主体的な学びを創発するにはプロジェクトの設計において以下の点が重要であると考えられる。

- 1) プロジェクトの目的を学生が十分に理解し、自発的に行動できるような環境を整えること。
- 2) プロジェクトを教員側でデザインしすぎたり誘導したりしないこと。また、失敗等の経験をする 것도重要。失敗等の問題を自ら切り開くことで、自分たちの学びを実感するきっかけが生まれる。
- 3) 学生自ら成し遂げたという達成感の醸成のためには、プロジェクトの成果が最終的に具体的な形となって表れることが望ましい。

### 参考文献

- (1) 野中郁次郎、竹内弘高：“知識創造企業 - The Knowledge-Creating Company”，東洋経済新報社(1996)
- (2) 澤崎敏文、田中洋一：“PBL型授業設計と企業参加型の授業実践”，日本教育工学会第30回全国大会講演論文集，pp.757-758（2014）
- (3) Toshifumi Sawazaki, Yoichi Tanaka: “Designing Courses based on SECI model with Mahara, e-Portfolio”，Proceedings of World Conference on E-Learning in Corporate, Government, Healthcare, and Higher Education(ELEARN)（2013）